
一時だけのセレブ猫

狂風師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一時だけのセレブ猫

【Nコード】

N4709V

【作者名】

狂風師

【あらすじ】

ある女性貴人に拾われた1匹の元ノラ猫の物語。

(前書き)

いつもとは少し変わった作品を一つ。
大きな才ちは用意してないので注意。

女性「まあレミちゃん、なんてかわいいのー！」

レミ「に、にゃ〜」

女性「さ、次のお洋服は…！」

猫を置き去りに、洋服部屋へと走っていく女性。

床には赤いじゅうたんが敷かれ、これでもかというほどの眩いシヤンデリア。

レミ「どうも。たった今『レミ』と名付けられた元ノラ猫です。この声は他の人には聞こえないんでご安心を。俺とあなただけに聞こえる不思議な言葉なんです」

長つたらしい台詞をサツと済ませた猫は、再び女性が持ってきた服を着せられる。

白いフリルがたくさん備わった、ピンク色の猫用ドレス。

あっという間に着替えが終わると、稲妻みたいな光の攻撃。

シャッター音も同時に聞こえてくる。

それが終われば、着ていた服を脱がされ、女性はまた走っていった。

レミ「あと、『レミちゃん』って呼ばれましたが、俺はオス猫です。女物の服を着せられましたけど、本当はオス猫なんです」

女性が戻ってくると、今度はゴスロリ風な服を持っていた。

当然それを着せられ、また写真を数枚。

今着たばかりの服をすぐに脱がせられ、床に乱雑に投げ捨てられる。

その場にいるメイドさんがそれを拾い上げ、丁寧に畳んで机に置いていく。

レミ「一体いつまで続けるんでしょうね、あのババア。…おっと失言でしたね」

その後も疲れを知らないような女性は、あれから30着ほど着せ替えを楽しみ、猫を抱えて別の部屋へと移動。

レミ「音楽ってやつは、聞いてると眠くなるんですね…。ノラの人に聞いたのは車の騒音、魚屋の叫び声…懐かしいですね。ほんの数時間しか経ってないというのに」

女性は椅子に座り猫を抱き、ゆっくりと揺れている。

ピアノとバイオリンの生演奏。

静かな落ち着いた音楽が流れる中で、女性は紅茶を嗜んでいる。

猫はまぶたを重くし、もはや何も考えていないようだった。

レミ、「ノラよりは、こっちの生活が…いいですね」

猫はまぶたを閉じて、眠りに落ちていった。

猫が目を覚ました時、目の前には赤く大きなたらこがあった。

それはたらこではなく、女性の唇だった。

猫は多少体をビクつかせ、自分を包んでいた布団から這い出た。

レミ、「つい寝てしまいましたが、あれはさすがに驚きますよね。想像してください、油がギツトリのデカイ唇を。嫌でしょう?」

ノラの時に習得した技なのか、器用に部屋を出ていく猫。

女性が起きる気配はなかった。

廊下の隅を歩いていると、メイドたちの声が聞こえてきた。

猫はその声ができる方へと足を進めていく。

メイドA「もう嫌になっちゃう。あのババア、猫に着せた服をわざわざ床に捨てるのよ。バカじゃないの」

レミ「…どうやらババアと呼んでいたのは俺だけじゃないようですね。安心しました」

メイドB「私なんてこの前、アイツがこぼしたワインを拭かされたのよ。それも足。自分で拭けっつての」

レミ「相当嫌われているようですね、あのババア。どれ、ここは俺が彼女たちを癒してあげましょう」

声がする部屋のドアを前足で引っ掻いて、中にいる人に知らせる。

するとすぐにドアは開き、すぐに猫は発見された。

メイドA「猫は可愛くていいんだけどね」

レミ「にゃ〜」

鼻を鳴らしメイドたちに擦り寄る。

メイドたちはしゃがんで、猫を撫でて楽しんでいるような表情を見せる。

メイドB「もしかしてこの猫も、あのババアが嫌で逃げ出してきたんじゃないの」

メイドA「かもねー」

レミ「にゃー」

しばらく遊ばれた猫だったが、嫌ではなかったようだ。

少なくとも、あの女性と遊ぶよりは、よっぽど楽しかったに違いない。

メイドB「そろそろ仕事に戻らないとね」

メイドA「そうよね。仕事はしたくないけど、ここで働いている限りはおいしい料理があるからね」

メイドB「料理だけはいいのよね、料理だけは」

メイドA「そういう事だから、バイバイ猫ちゃん」

レミ「にゃ〜」

メイドB「なんだか人間の言葉がわかってるみたいね」

メイド2人は部屋から出ていく。それと一緒に猫も部屋を出ていく。

またも暇になってしまった猫。

レミ「たまには人のために何かをするのも悪くないですね」

来た方向とは別の方向へとゆっくり歩いていく。

すると肉の焼けるようないい匂いが、猫の鼻をくすぐった。

人間でも誘われるような、とてもいい匂い。

そちらの方へ足を運んでいくと、再び人の声がした。

今度は男たちの声であった。

コックA「まーた料理しなきゃなんねえのかよ。もう辞めてやろうか」

コックB「あいつ、自分が嫌いな味だと投げ捨てますからね。ぶん殴ってやりたいですね」

コックA「そうなんだよ。今度お前がやってこいよ」

コックB「冗談キツイですよ」

シェフ「つまんねー冗談言ってないで、手を動かさせ手を」

コックB「あーい」

コックA「料理の中にゴキブリでも混ぜてやりたいよ」

コックB「それいいっすね」

どうやらあの女性は、こっちでも嫌われているらしい。

猫は厨房には入らず、そこらの物陰へと入っていく。

壁と置物の裏、やや湿ったような隙間。

カサカサと動く黒い物体を仕留めた猫は、それを口にくわえて厨房へ入っていった。

物を床に置き、一声鳴いた。

コックB「先輩、猫が入り込んでますよ？」

コックA「ご丁寧にゴキブリを連れてか」

レミ「にゃー」

コックB「入れましょうよ、これ」

コックA「バカ言うな。そんなのがばれたら、俺たちの首が飛ぶどころの問題じゃないぞ」

シェフ「…ばれなきゃいいんだろ、馬鹿だな」

コックA「まさか本当にやるって…」

コックB「ばれなきゃいいんですよ、先輩」

食材を刻む音、炒める匂い、そして何とも言えない虫酸の走る音。

包丁で刻まれすり潰されたそれは、肉にかけるソースの一部として生まれ変わった。

味見は誰もしなかったが、見た目的にはソレが入っているとはわからない。

コックA「食うか？」

猫にソースを出してみるが、完全に顔を背けられる。

コックB「ばれないっすかね？」

シェフ「強めの味付けにしとけば大丈夫だろ」

シェフが味を強化している最中、コックAは猫に餌をあげていた。

余った材料の小さな魚の切り身。それと出汁を取った後のかつお節。

猫はどちらも食べつくし、厨房を後にした。

当てもなくふらついていると、先ほど会ったメイドの片方が猫を捕まえた。

メイドB「ババアが起きるなり大騒ぎよ、まったく…。寝てる時だけだわ、静かなの」

女性が起きると、一緒に寝ていたはずの猫がいなくなっており、メイドに探させていた。

メイドの腕の中で大人しくなっている猫は、元の女性のところへと運ばれていった。

猫が無事戻ってくると、聞くに堪えない声で嬉しさを表現していた。

自分の声の酷さに気付いていないのは、恐らく本人だけだろう。

その後、ディナーが始まった。

前菜、そして例のステーキ、デザート。

意外と気付いていないので、普段通りに食べていた。

女性が用意させた猫用のディナーも、一般常識とはかけ離れたものだった。

バランスゲームみたいなオブジェ。それが猫用のディナーらしい。

レミ「…なんとも食べにくい物を出してくれましたね、あのババア」

コックやシェフの方を睨みつけたが、まるで気付いていない。

しかも例のステーキに関わった3人は、してやったりという顔で女性を見ていた。

ずいぶんと気分が良いだろう。

ディナーが終わるとすぐに入浴の準備にと、メイドが慌ただしくしている。

あれこれ服を持って、タオルを持って、さらに猫用のお洋服も持って。

半強制的に浴場へと連れて行かれていった猫。

やはり一般家庭では想像もできない浴場が広がっていた。

猫は浅めの湯に入れられ、メイドに体を洗われている。

その間にも、女性は馬鹿でかい温泉に浸かり、和やかな表情をしている。

メイドC「私も猫とお風呂に入りたいわ」

レミ「俺もですよ」

メイドC「いつその事、私と生活してみない？ ネコちゃん」

レミ「できるならそうしたいですよ」

メイドC「なんて、猫に行ってもムダか」

レミ「その通りですね」

通じない会話を成立させると、猫は女性のいるところに運ばれていった。

洗ったばかりの体を、すぐさまに汚されていった。

レミ「…汚れるのは慣れてますよ」

風呂も無事とは言えないが、ようやく終わった。

すでにベッドメイキングは済んでおり、あとは寝るだけの状況だった。

メイドの「おやすみなさいませ」の声で、電気は消され、カーテンは自動で閉められた。

猫は女性にくっ付けられ、見た目的にとてもキツそうであった。

しばらくするとけたたましい音が響き、暑苦しい猫は這い出し部屋を出ていった。

誰もいない、暗い廊下を音を立てずに歩いていく。

メイドのミスなのか、僅かに開いていた窓から外へと出た。

「レミ」この屋敷と名前にお別れです

猫は器用に窓を閉めると、ノラ猫へと戻っていった。

(後書き)

大学の帰りのバスの中で思いついた。
たぶんいつもの作品とは、少し変わった風になっていると思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709v/>

一時だけのセレブ猫

2011年10月7日01時57分発行